



始



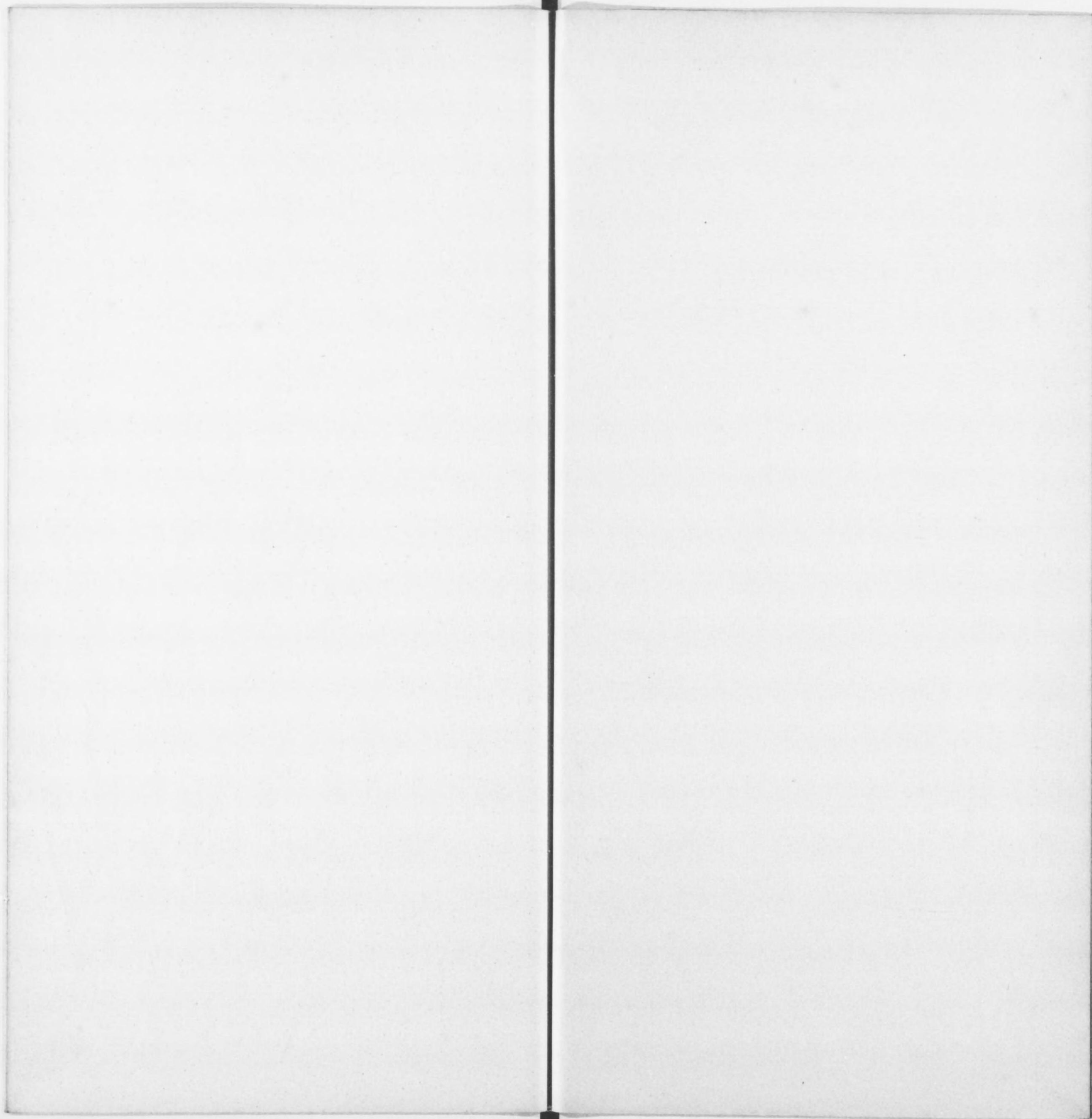
300
33

もろづら

300
33

183

えろ、ほ





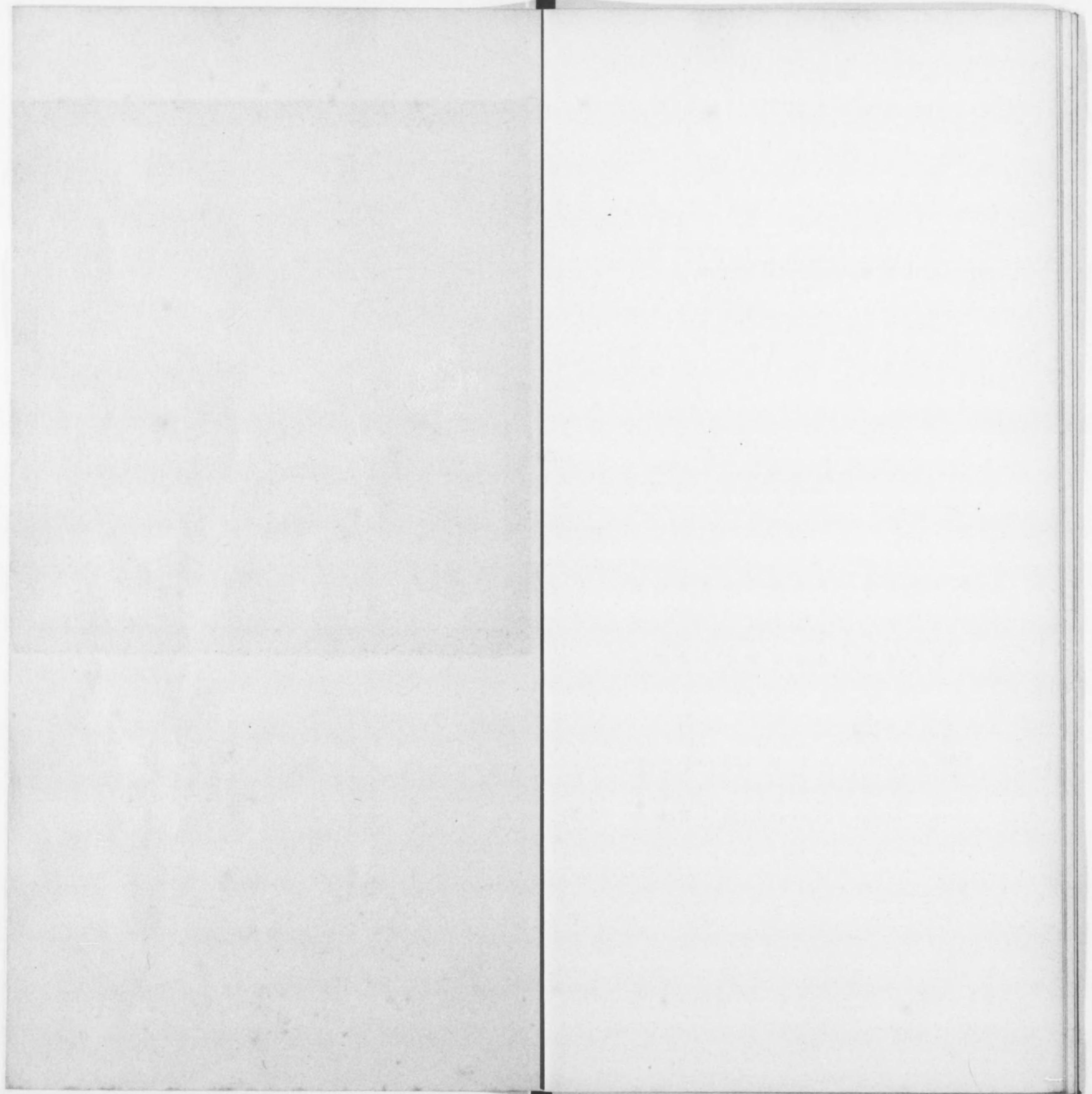
えろ、ほ

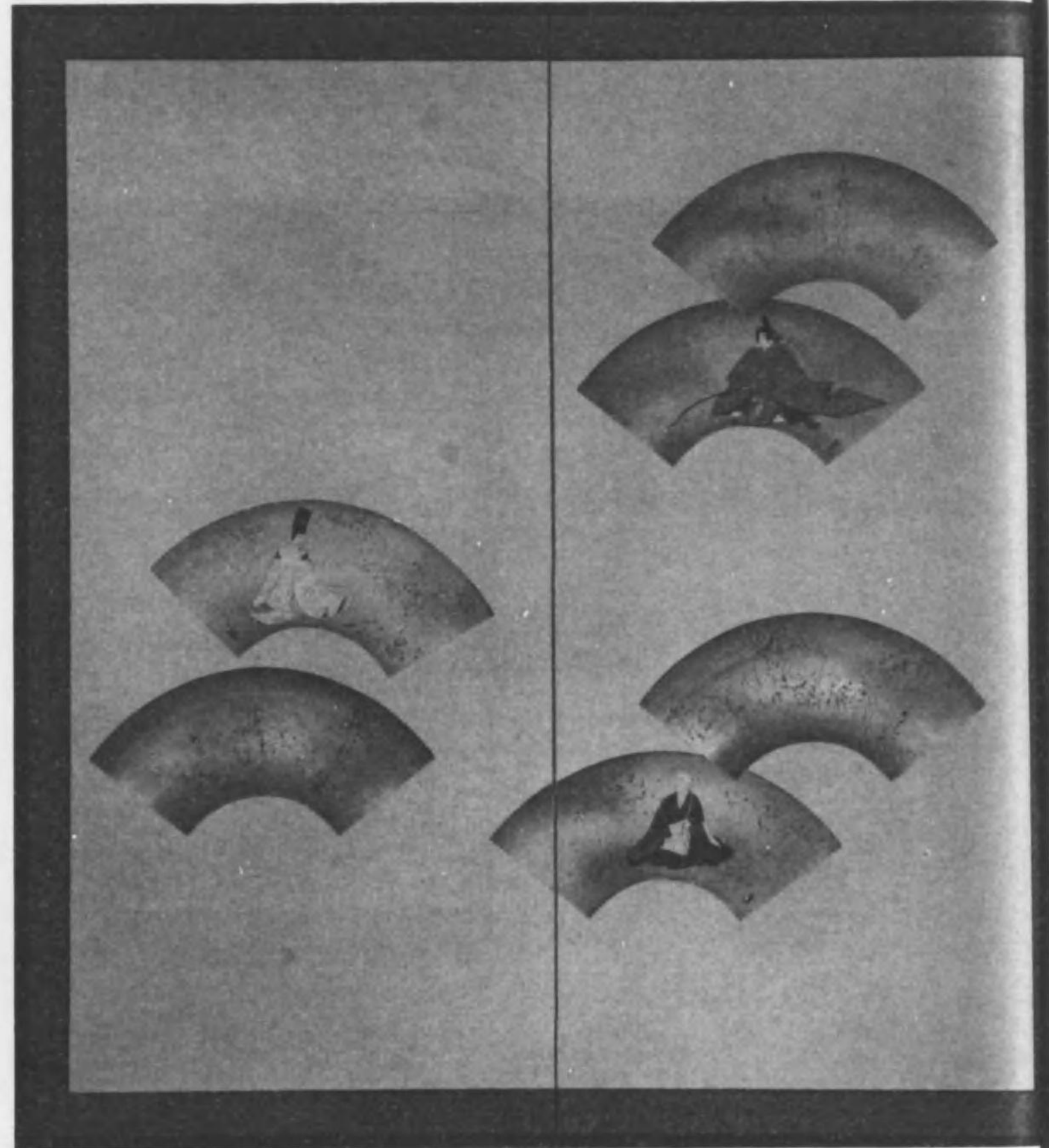
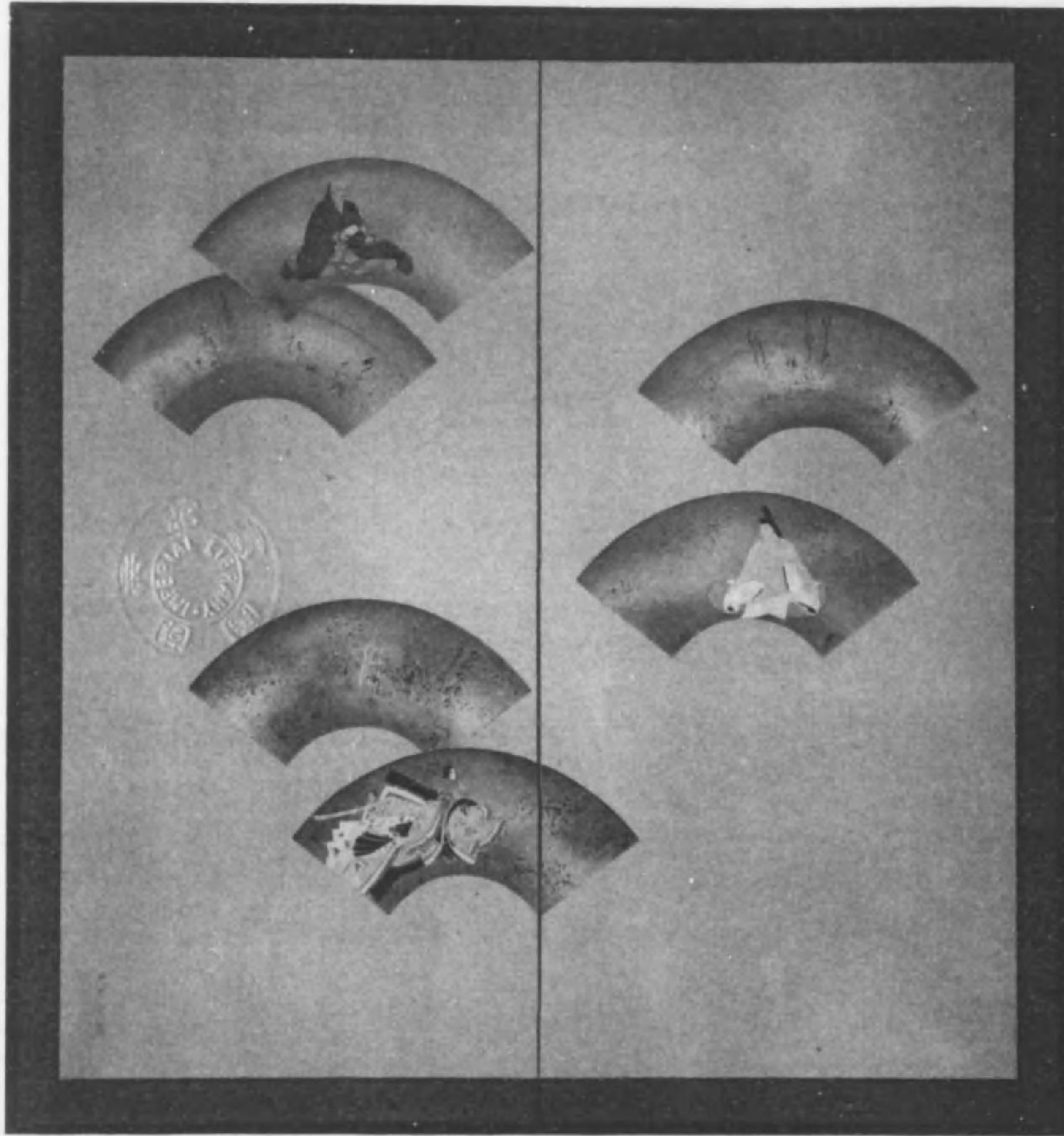


畫の境致は歌の境致であり、歌の世界は畫の世界である。二者は一であつて、決して二ではない。もとより二者は、猶各その獨立した領土をもつて居る。が、合一すると、範圍が廣くなるとともに、光明が加はつて来る。こゝに逍遙し、優遊するのは、藝と文とに携はるもの、特權であらう。今この意味の、畫と歌とを合せて一幅としたもの三十餘を集めて、一帖として、「もろかづら」と名づけた。われわれの畫の境致と歌の世界と、ともに狭く、且つ暗いが、われわれの満足と愉悅とはこゝにある。しかし、看る人は、たゞ卑にして陋なるを笑はれるであらう。

昭和九年十二月一日

編者しるす





世の中に絶えて櫻のなかりせば
春の心は長閑からまし

業平

我庵は都の異しかぞ住む

世を宇治山と人は言ふなり

喜撰

吹くからに秋の草木のしをるれば

むべ山風をあらしと言ふらむ

康秀

春雨の降るは涙か櫻花

散るを惜しまぬ人しなれば

黒主

天津風雲の通語吹きとちよ

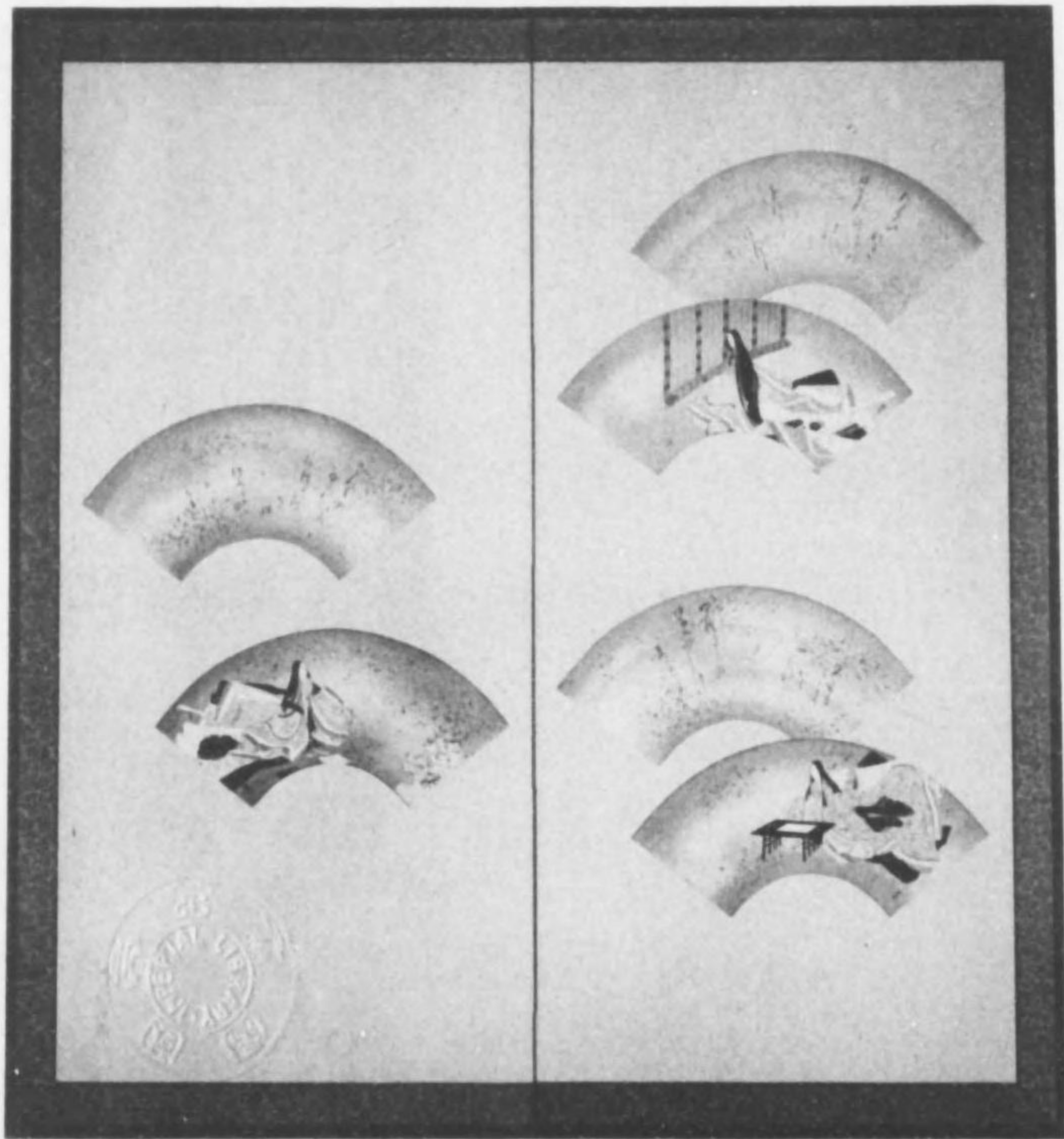
少女の姿しほし止めむ

瀬明

わびぬれば身を浮草の根を絶えて

まそふ水あらばいなむとぞ思ふ

小町



清少納言

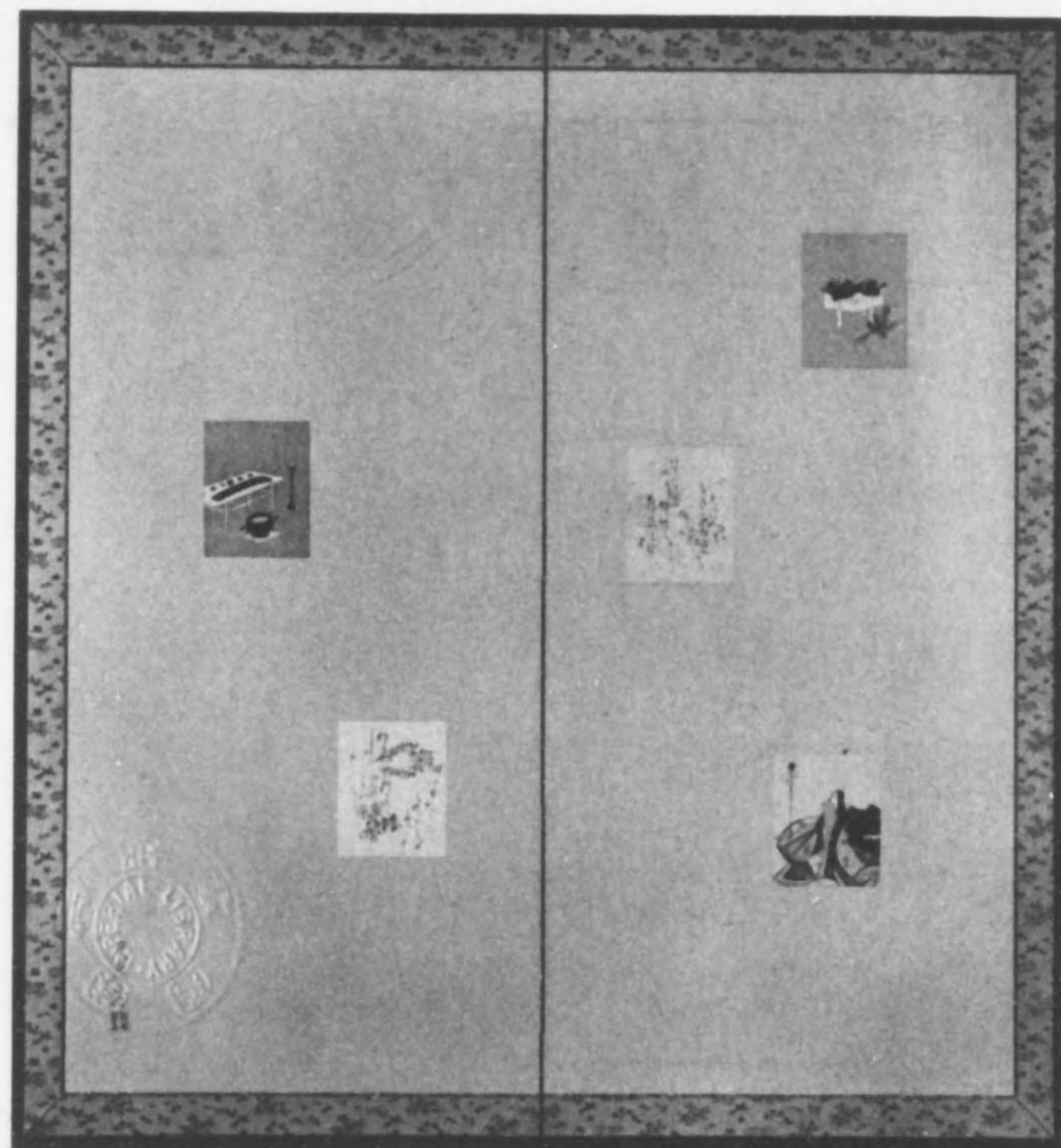
たくひなき雪の光はたまただれの
小簾まくまゝに現はれにけり

紫式部

ぬばたまの夢の浮橋末までも
さやかに見する月の影かな

伊勢大輔

言の葉の色そはさらば八重櫻
今日九重にじはさらまし



五
節
句

曲 水

唐人も舟を浮べて遊ぶてふ
今日ぞ我竹子花かづらせよ
(古歌)

重 陽

我翁の菊の白露今日ごとに
幾世たまりて潤となるらむ
(古歌)



須磨の夕

舟より船さもの歌ひの、しりて舟を行くなどほのかに聞えて、たゞちひさき鳥の浮べると
 見やると、もささざと心割けなるに、舟の運んで啼く聲、さぢの音にまがへり、打鼓め給ひて、
 御渡のこぼる、をかきほもひ給へる御手つきの黒木の御歌珠にはま給えるは、故郷の女戀
 しき人々の心地、な慰みにけり。
 (源氏物語)



宇治宮の御君

入るもはつかなしや川流の
たもへだてたる有明の月



登
宿
梅

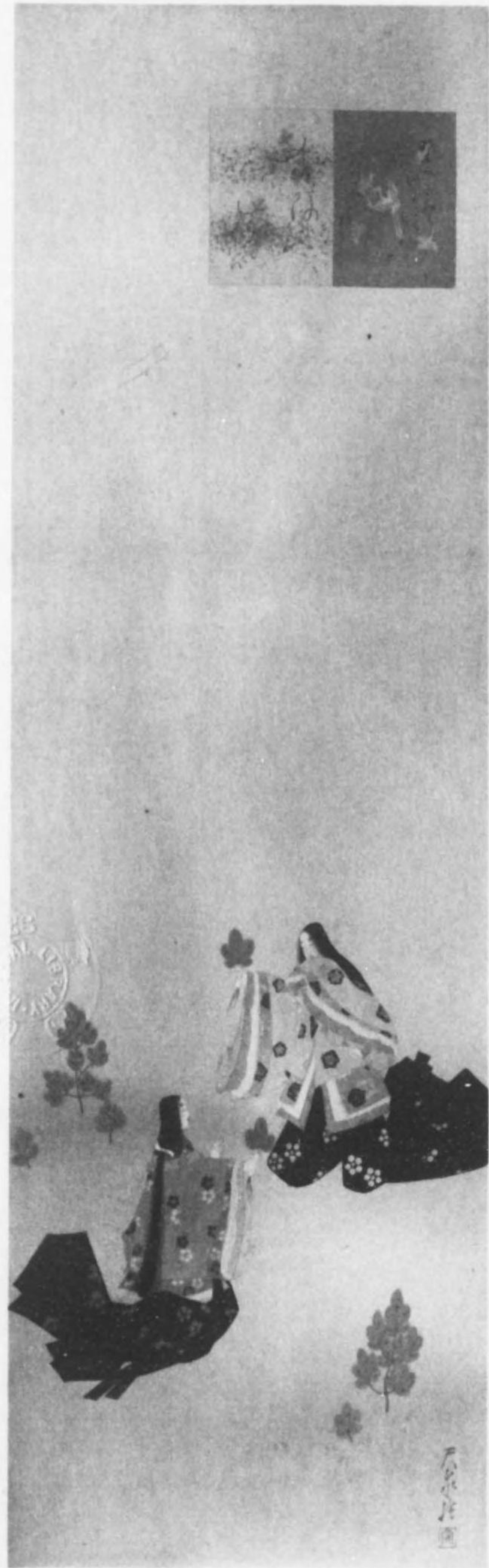
登はよし恨むとも擗けてむ
御前の梅は枯れぬとぞ聞く



春

野

はらばると野邊の苗にひかれて
摘めど若菜の数は少なき



千

日

野邊ごとにひき較ぶれど姫小松
千代のほかなる色なかりけり

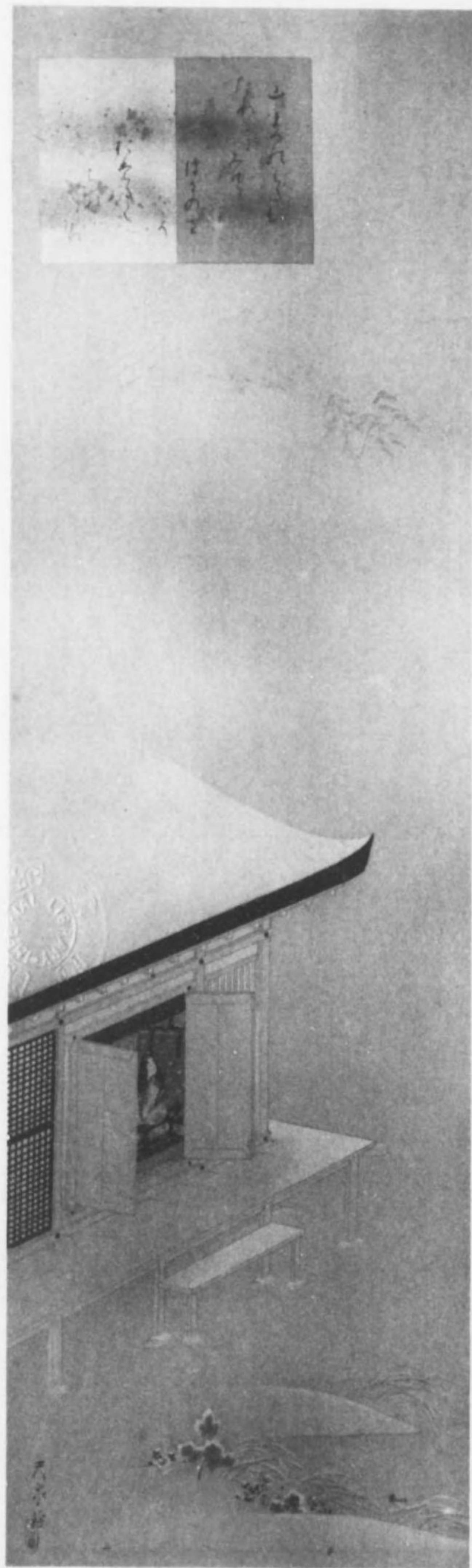


春
の
装

紅の濃染の梅に朝日さし
軒端明るき春となりぬる

ひらひら
うららかに

うれなうれ
うららかに
うららかに
うららかに



春
雪
山
松の枝もたわゝに見ゆるかな
春の雪こそ重たくは降れ

櫻

舞

柔る詞に任せて行かむ散る花の
吹雪に暮れぬ春の大野は



大野

物

語

稻荷山杉のしるしを頼みつゝ
幾度のぼる坂路なるらむ



加茂祭 諸共にかさす委に置く露の
元も清き神の廣前



深

夜

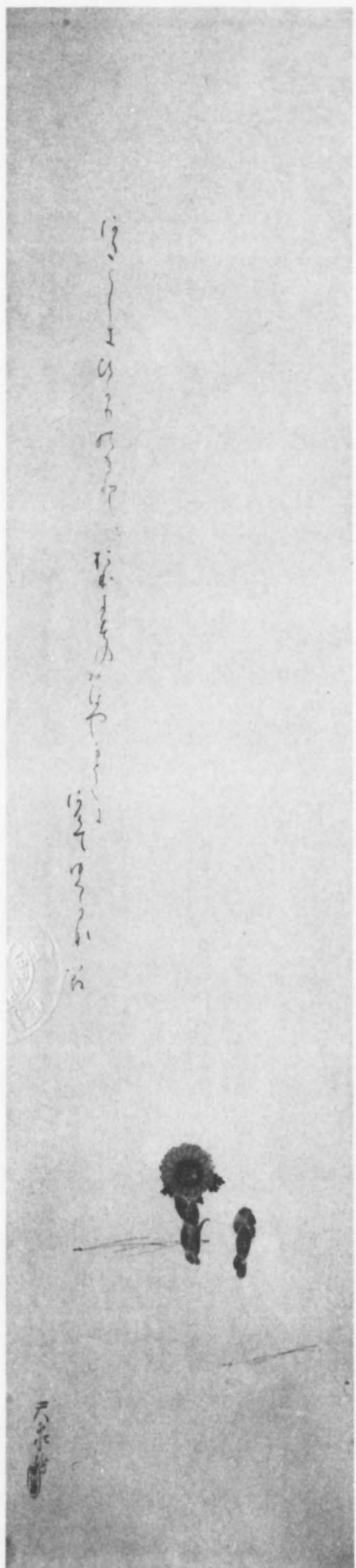
露霜のれき居ぬ人は知らざらむ
更けて行く夜の秋のあはれを



元

朝

新しき光のもとに大君の
大徳國明けて行くかな



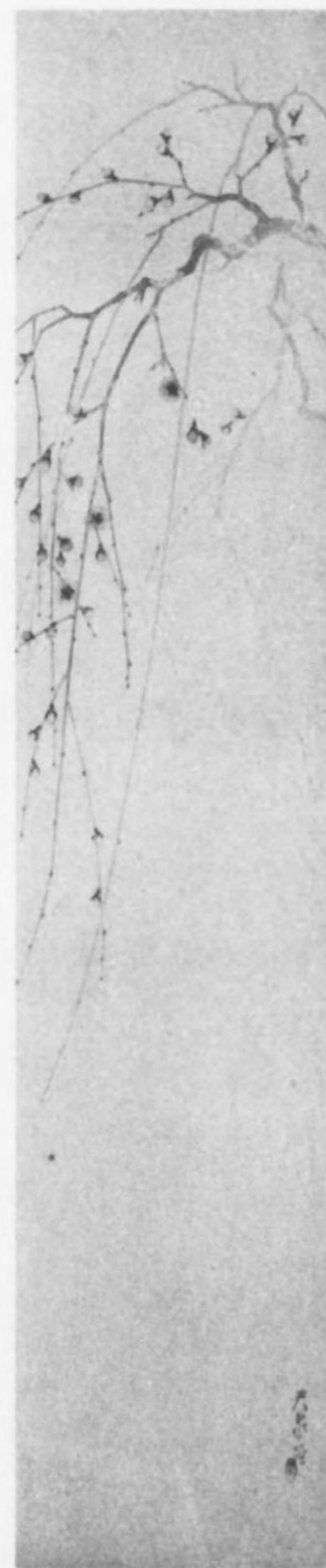
春の朝

百千鳥啼りかはす聲の中に
御苑の春の夜に明けにけり



秋の光
むら時雨まだ降り残る秋山の
梢さやかにさす夕日かな

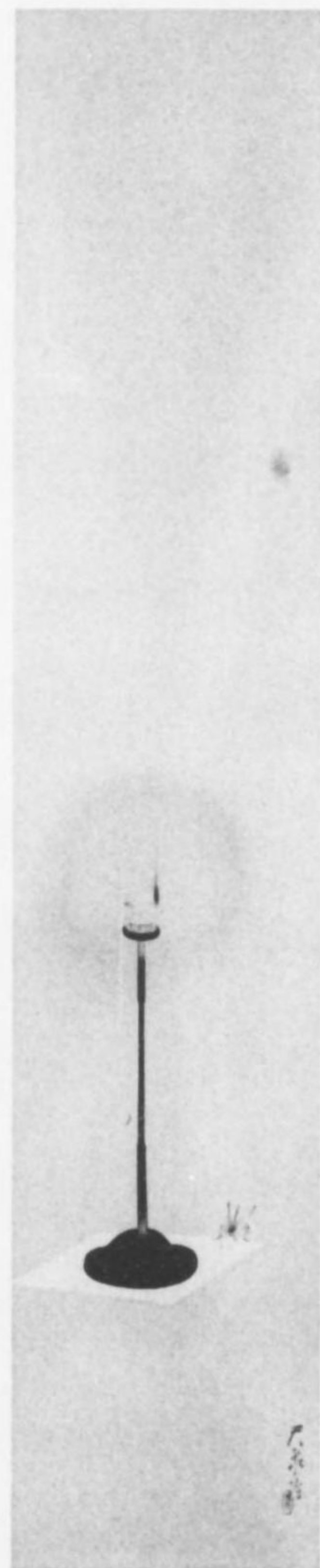




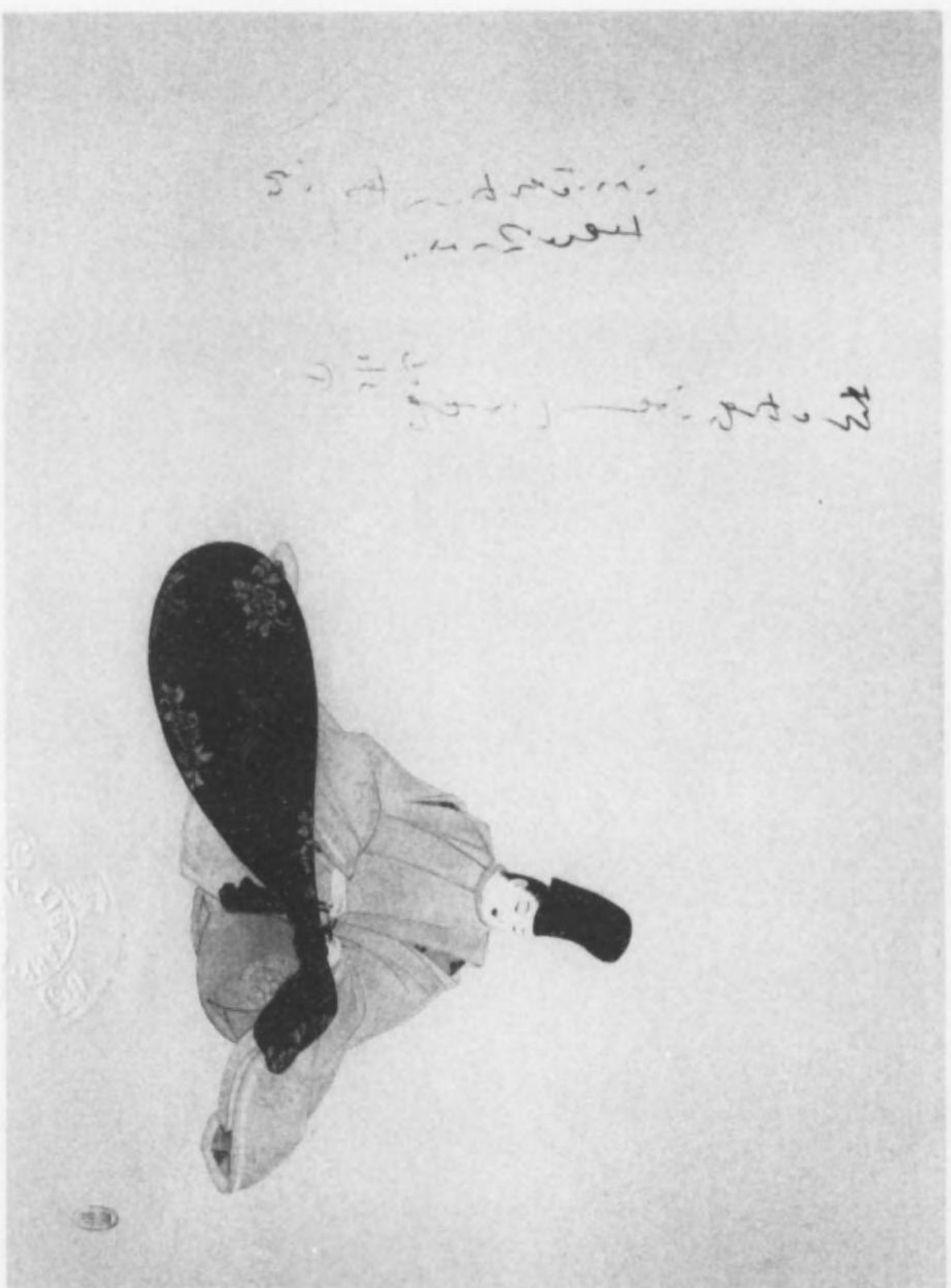
春

昭

明けて行く空の霞にまぎれつゝ
消えぬともなく消えし月かな



秋
夜
捲き返し捲き返しつゝ見て行けば
秋の長夜も名のみなりけり



御 琴
松風は今靜まりぬ山水の
音める響にいさ合はせてむ



新 撰
 眼もなき庭の真砂に照りはえて
 年立つ朝のかげぞ本ばゆき



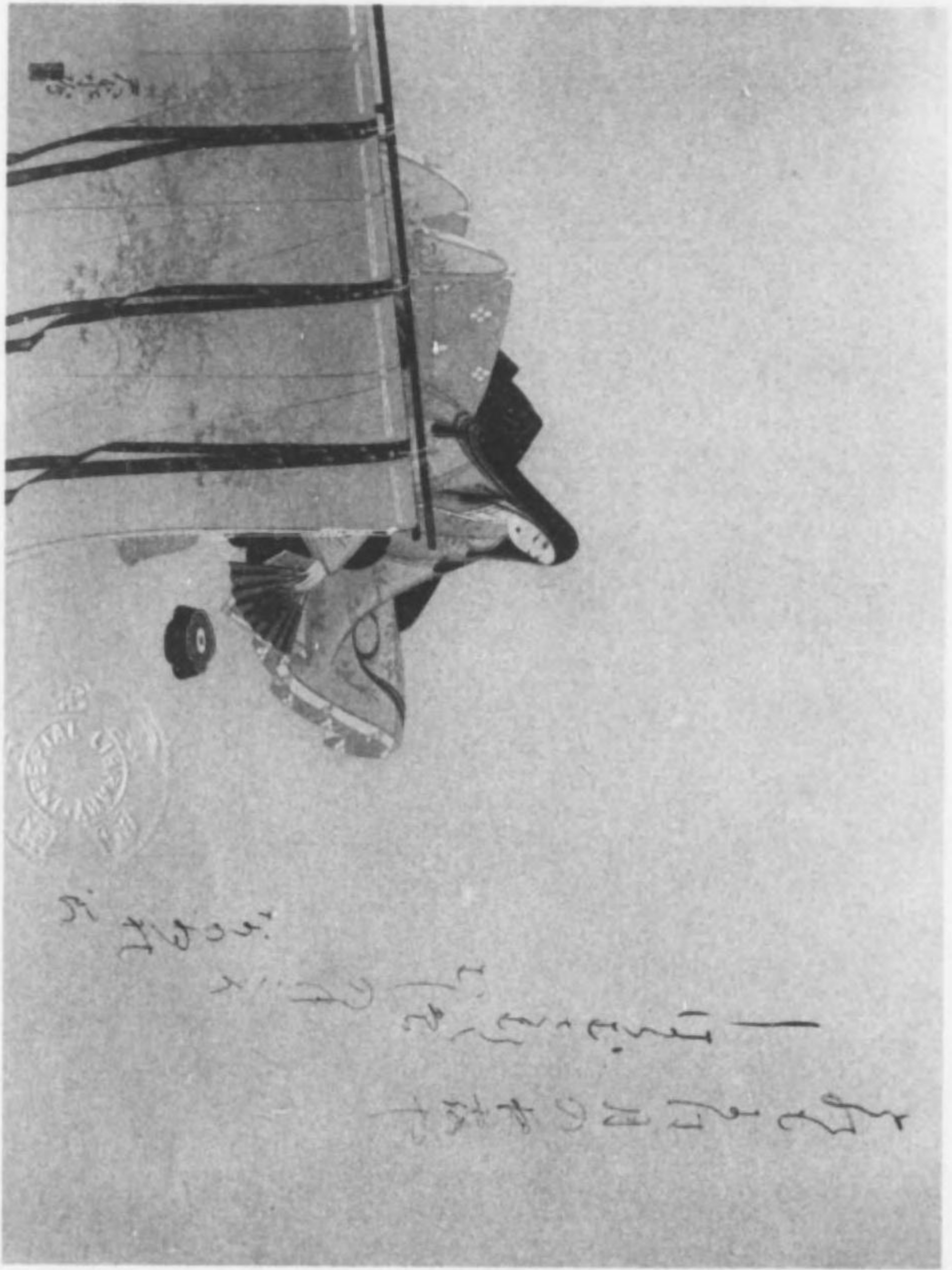
石田 園

月夜に
 月も招く燈はあはれど
 昔にかへす昔こそ懐かぬ

暹

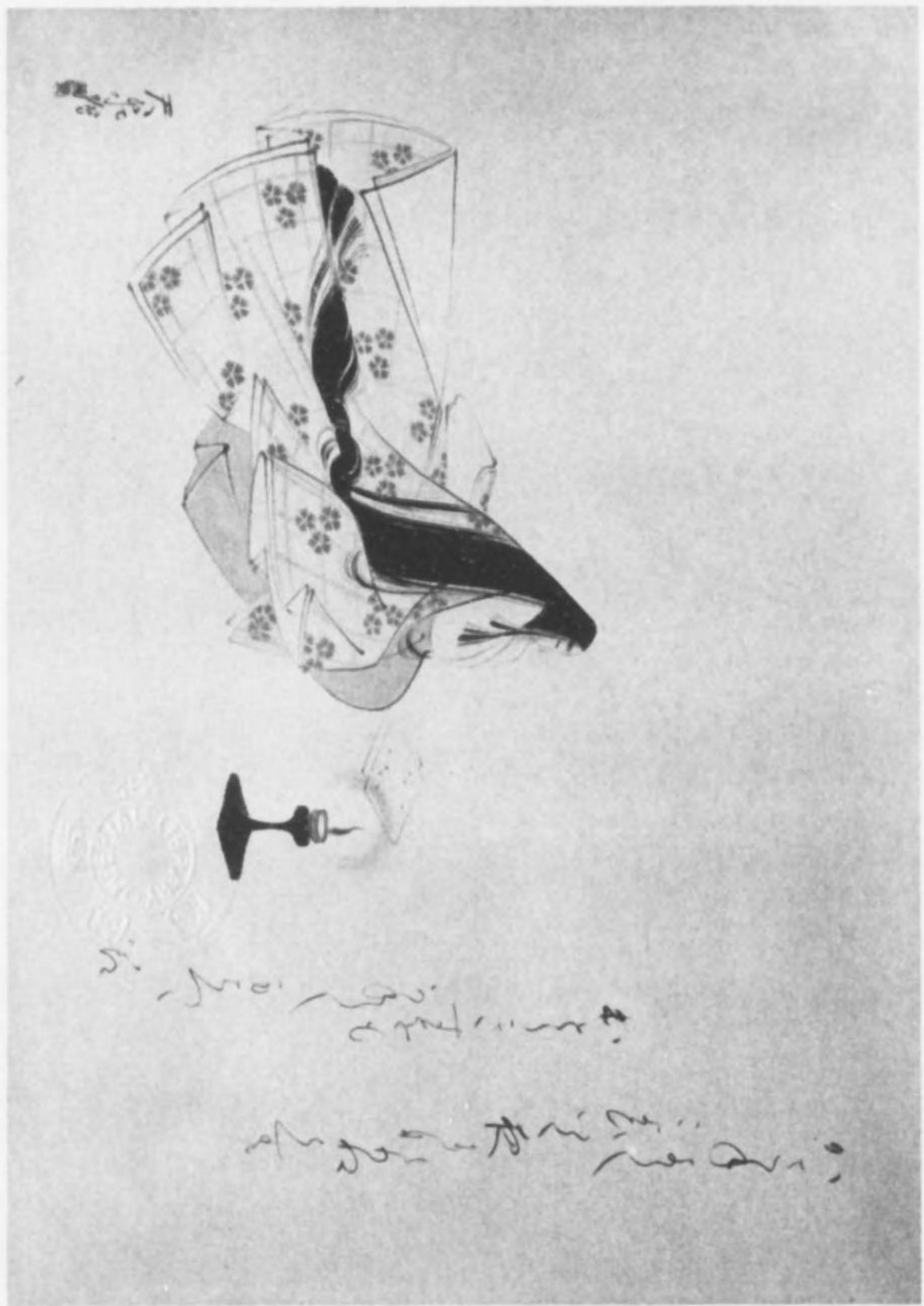
也

暹 月夜に
 月も招く燈はあはれど
 昔にかへす昔こそ懐かぬ

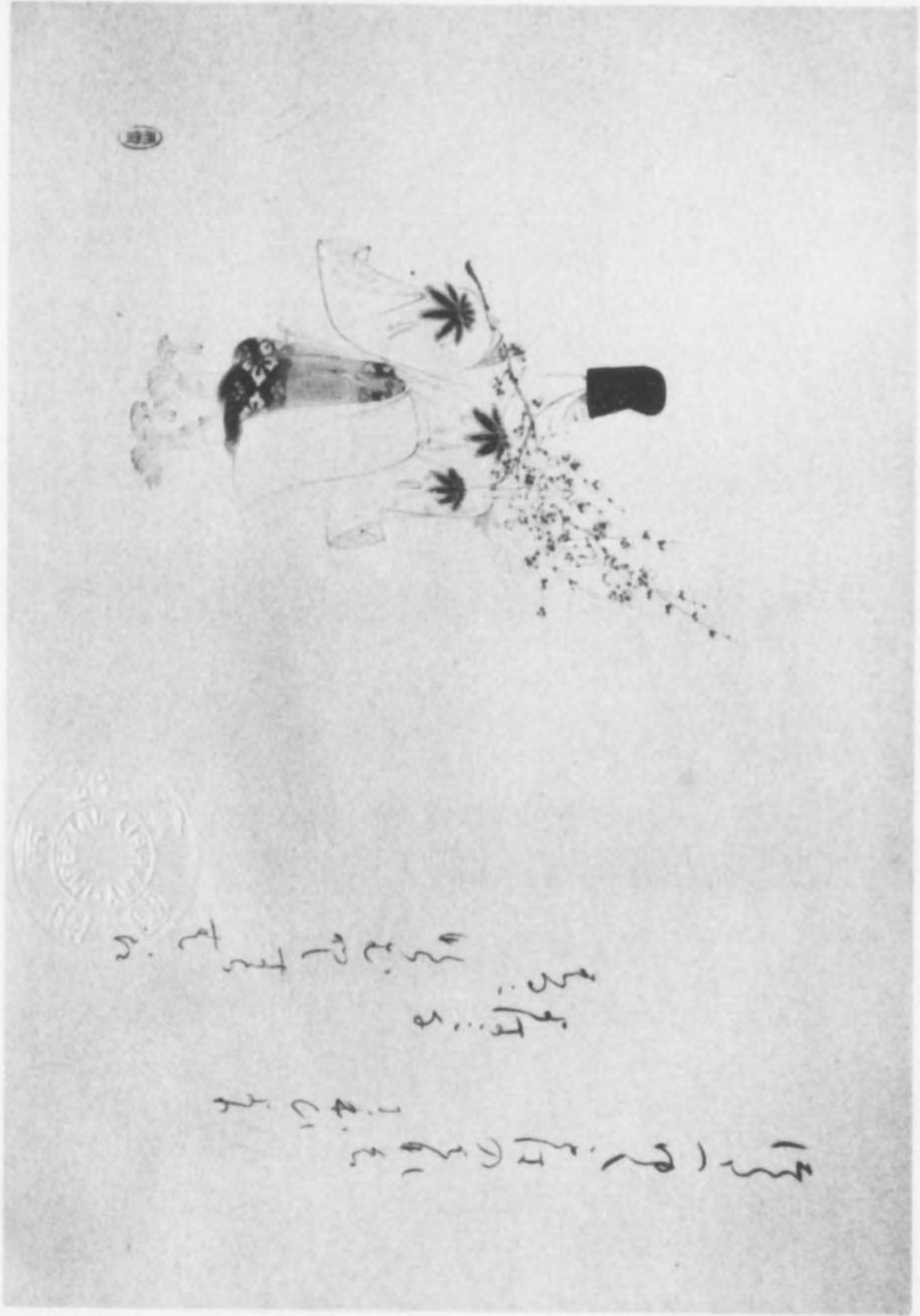


船の音

外面には月の夜露や雲からむ
張くも船の音こそなりぬれ



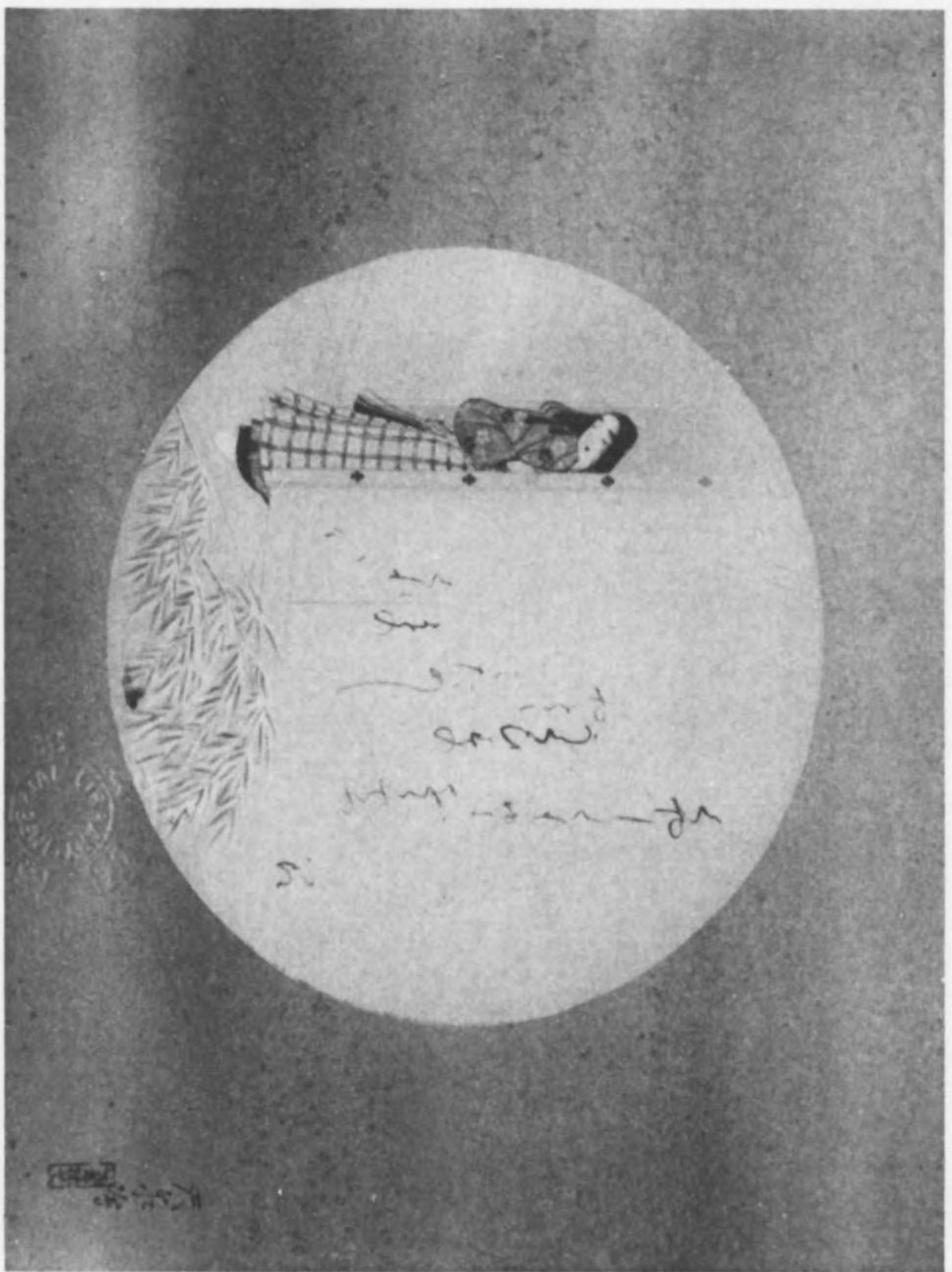
夏の夜
 夏に來て今宵幾夜になりぬらむ
 ほとゞさすとも夢に持ちつゝ



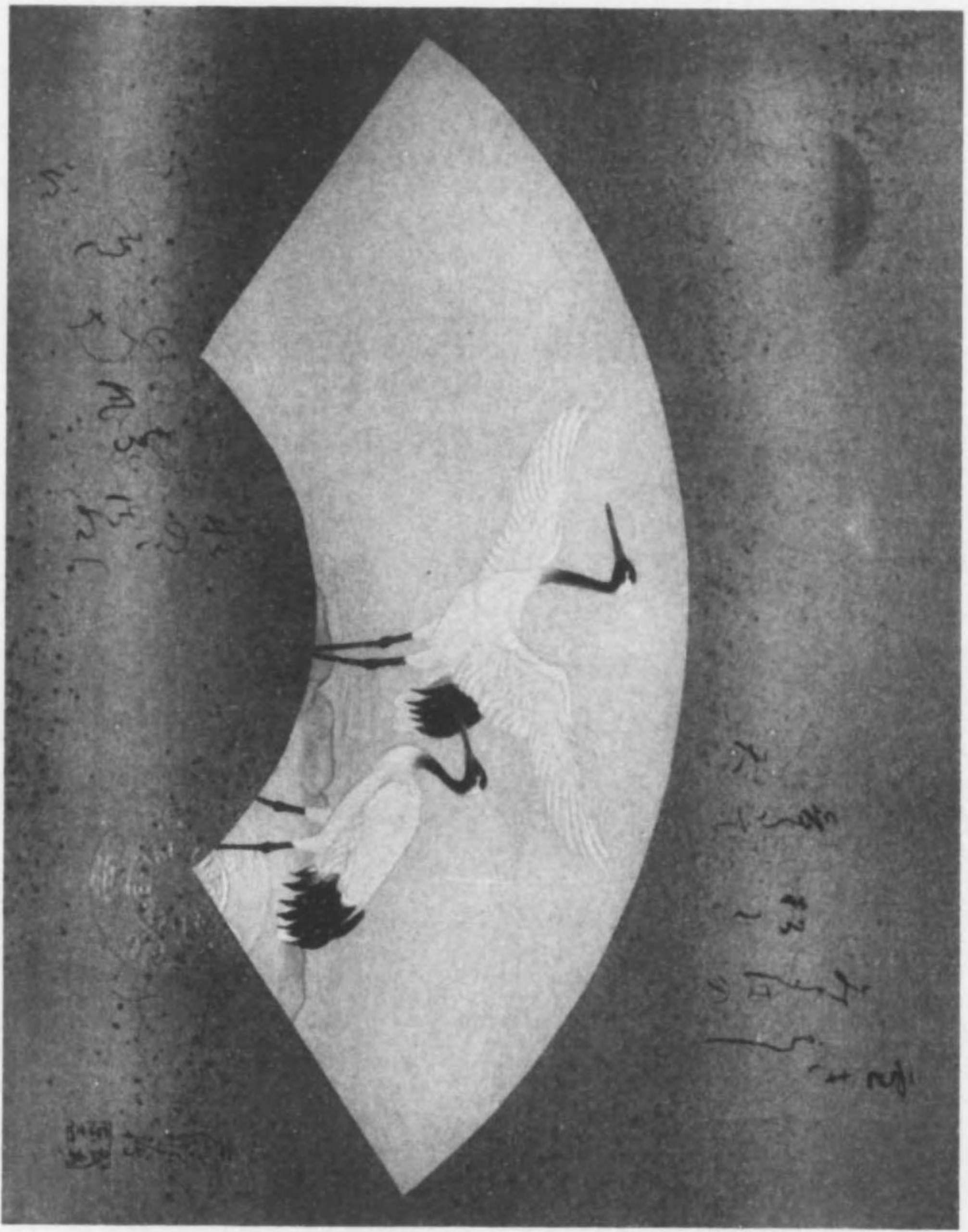
懸想文賣
 傳へゆく言葉の花の匂より
 世はみな春にならむとすらむ



その方かりき
 歸る雁啼く宵聲かて嵐山
 櫻咲く日となりけるかな

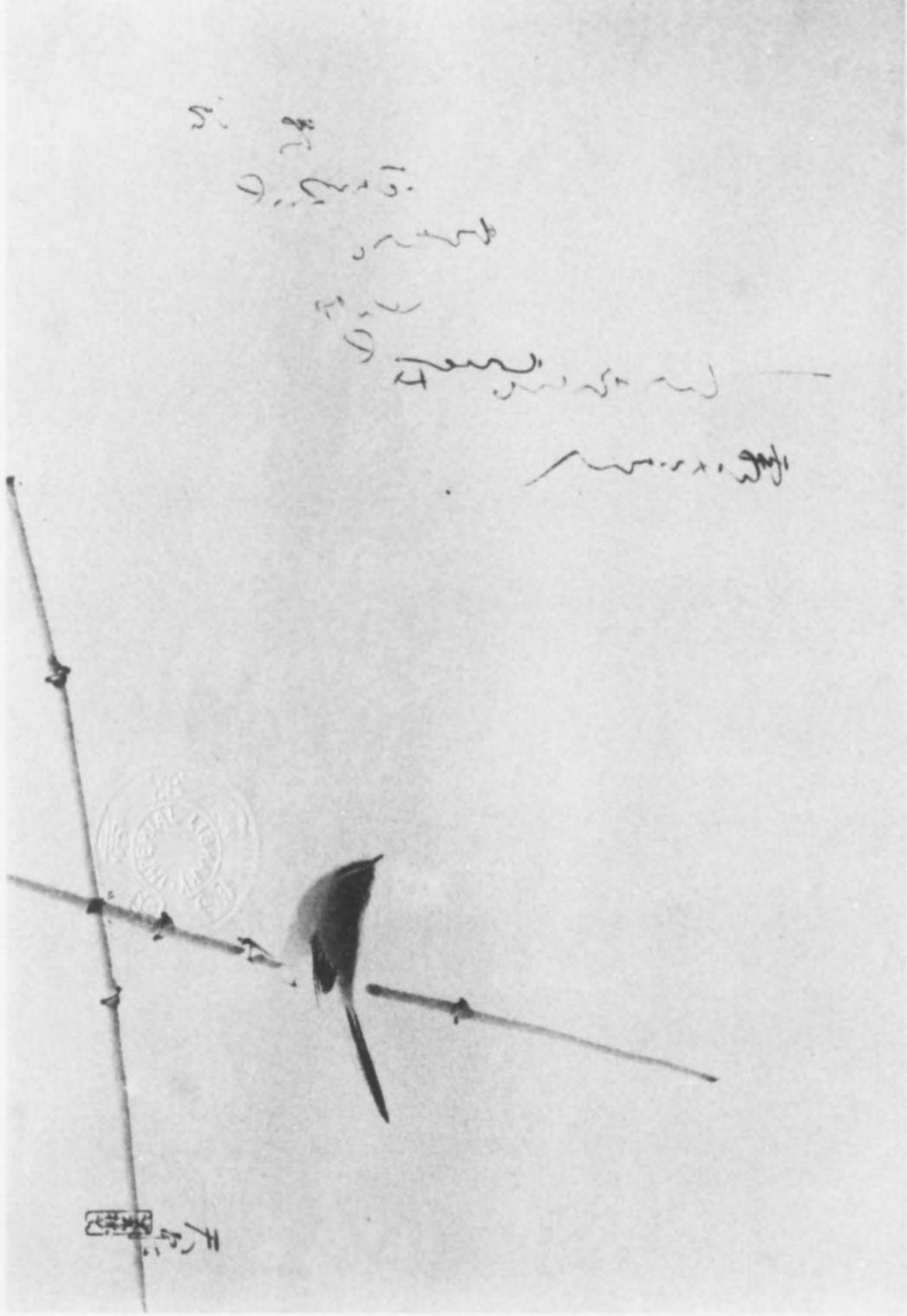


朝
雪
梅しくも雪に折らせつ葉の
梢と定めし窓の奥竹



池邊鶴

雪消えし汀の松に背立てゝ
米穂さぬ春風ぞ映く



早 春
 意消えて平したる真庭の
 竹を渡り来る朝日子の影



山
櫻
思ふどち行きて乱ぬ間に散りやせむ
花映く寺の鐘響くなり



立る遠かき霧の上に現はれて
透かなるかな山の圓

昭和九年十二月五日印刷
昭和九年十二月十日發行

編纂兼

發行者

攝影印刷

發賣所

東京市小石川區白山町一〇七

荻生守俊

東京市京橋區西八丁一ノ二

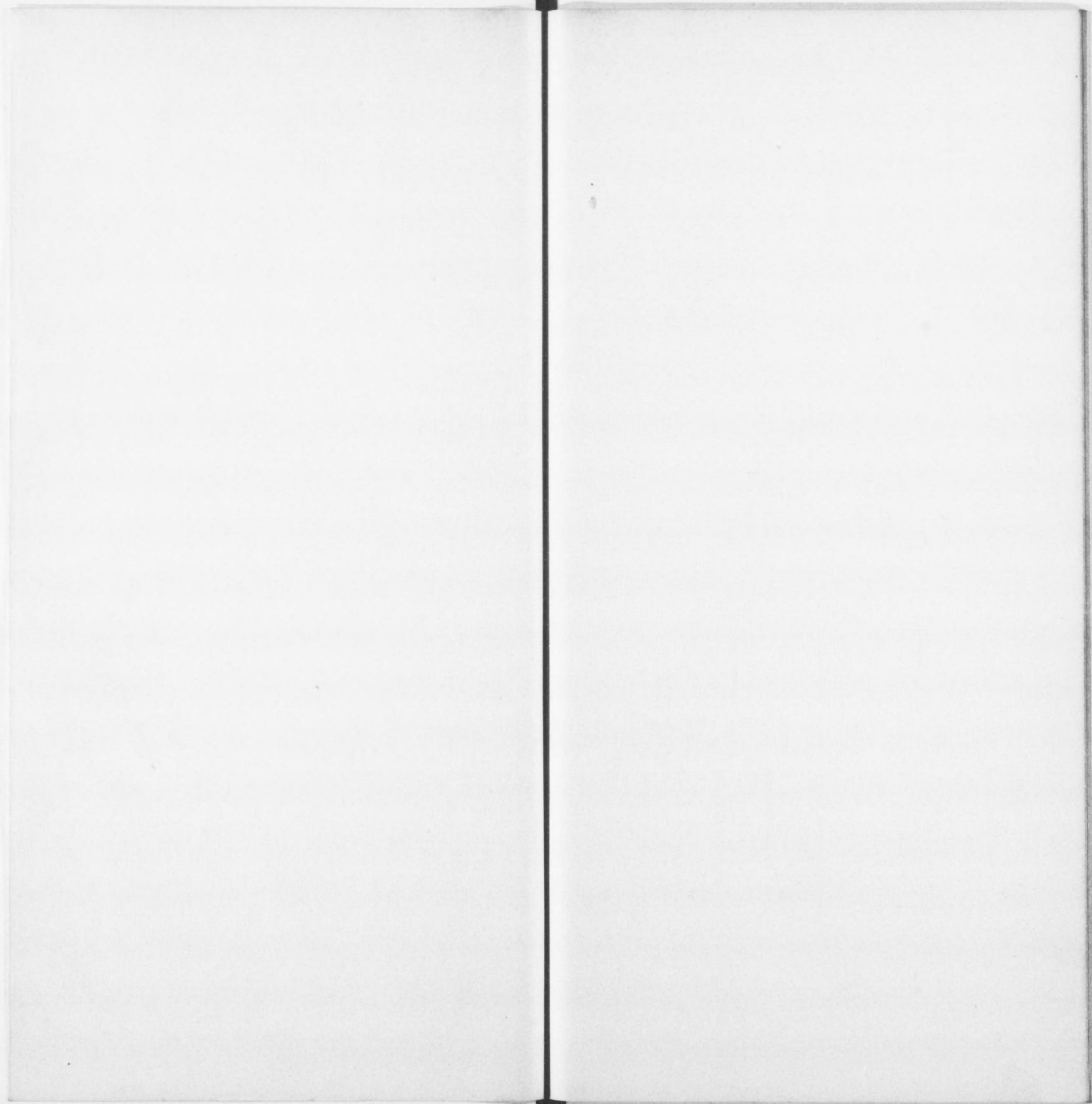
古今堂

東京市京橋區西八丁一ノ二

古今堂

電話東京二五九九番
電話東京二五二六番

9.12.7



300
33

300
33

終